

〈論文〉

四神信仰と陰陽五行思想、二十八宿の関係について

Examining the relationship of Four Gods belief with Chinese philosophies of Five Phases and Yin-yang, as well as the twenty-eight lunar mansions of Asia

Lazar Marianna (ラーザール マリアンナ)

概要

四神（青龍、白虎、朱雀、玄武）の東西南北を司る神獣という概念は、陰陽五行思想を根拠に元々中国古代から始まったが、その後、アジア周辺地域に伝搬し、日本にも到達してきた。先行研究では、考古学的・美術史的な研究（四神図、二十八宿図、十二支像）と思想的な研究（四神信仰、陰陽五行思想、干支、地の四方と天の四宮）が殆ど個別になされてきたが、本稿では、古代東アジアのこれらの思想がいかなる形態で日本へと伝来し、また平安時代の陰陽道に知られるような日本独特の形に変容を遂げたかを選び出した作品や文献資料をあげつつ短く跡付けたい。東アジアにおける四神信仰の展開の様相を、陰陽五行思想や二十八宿との連関から紐解くことを目的とする。それに加えて、四神と陰陽五行思想の関係が記載された文献を、また四神が司る四宮が記載された資料を参考にし、関係表を作ると共に、四神が果たした役割について紹介する。

Abstract

In this paper, I attempt to examine the developing relationship of the Four Gods belief of Eastern Asia in correlation with the Chinese twenty-eight lunar mansion system and the philosophies of Wu Xing (Five Phases) and Yin-yang relations by listing examples of ancient texts and artifacts. Part 1 includes introduction remarks of the Four Gods belief. In part 2, after introducing the Chinese theory of Taoist Five Phases, I intend to relate them to the Four Gods belief by showing ancient texts and excavated artifacts which contain writings or pictures representing the Four Gods and their correspondent color, season or direction. I also give a brief introduction about Onmyōdō, the traditional Japanese esoteric cosmology, being a mixture of natural science and occultism. It was introduced into Japan at about the beginning of 6th century. In part 3, I focus on the twenty-eight lunar mansions and how they are connected to the four cardinal directions, or in other words, how they are representing the Four Gods belief "in Heaven". While the Greek astronomers were cataloguing the star patterns as seen from the Mediterranean, astronomers in the Far East were developing a completely different celestial tradition. This tradition is presented within many of the cultures, including that of India, China, Arabia, and Japan. The developing Chinese tradition divided the sky into four parts as "Four Palace" of the Four Gods. Each quarter contains seven of the twenty-eight lunar mansions. The four sections of the sky are as

follows: 1. The Blue Dragon of the east, 2. The Red Bird of the south, 3. The White Tiger of the west and 4. The Black Tortoise of the north. The Blue Dragon of the east is associated with spring, the Red Bird of the south is associated with summer, the White Tiger of the west is associated with autumn, the Black Tortoise of the north is associated with winter. This system corresponds to the previously examined philosophies of Five Phases and Yin-yang, and had been introduced to Japan through the Korean peninsula by scholars. Remarkable examples of this intercultural exchange process are the ceiling decorations of graves, and other ancient burial artifacts decorated with constellations. This outlook on the world - symbolizing the life on Earth and later the life in Heaven - is representing an amazing cosmic view of the universe. In this borderless universe, the Four Gods will guide the "spirit" of the buried person to the afterlife in Heaven, and in the same time, the small world created in the tomb will protect the body forever.

はじめに

本稿では、東アジアにおける四神信仰の展開の様相を、陰陽五行思想や二十八宿との連関から紐解くことを目的とする。従来の研究では、これらが個別に取り扱われる傾向にあったが、ここでは、古代東アジアのこれらの思想がいかなる形態で日本へと伝わり、また平安時代の陰陽道に知られるような日本独特の形に変容を遂げたかを文献や作品をあげつつ跡付けたい。

最初の章節では、四神の概念と、四神と二十八宿の関係について紹介する。次章節では、道教の様々な説の誕生をきっかけに、中国の思想にどのように取り入れられたのかを述べる。四神と陰陽五行思想の関係が記載された文献を参考にし、関係表を作って考える。最終節では、古代東アジアの古星座（二十八宿）と四神が司る四宮の関係を分析しながら、参考文献をもとに各国の二十八宿の名前をあげる。古代天文学で四神が果たした役割について紹介する。

1. 四神とはなにか

四神とは青龍、白虎、朱雀、玄武のことで、これらはそれぞれ東、西、南、北の四つの方位を守護する神霊である。四神信仰が中国で始まったことはいうまでもない。しかし、いつごろ、中国のどこで生まれたのかは、未だ明白ではない。四神の起源は周代には存在していたが、四神の姿が定まり盛行したのは漢代の頃で、その頃役割も定まったといわれている。四神は「四方を守る神」というだけのものではない。なぜならば、道教の陰陽五行思想にも中央に銀色の龍を加え数を合わせた上で取り入れられているからである。四神の東西南北を司る神獣という概念は、陰陽五行思想を根拠に中国古代から始まったが、その後、アジア周辺地域に伝搬し、日本に到達したのは遅い。日

本と関係の深い朝鮮半島の高句麗の壁画などに四神図が見られるものの、五行説・陰陽説によって区分される捉え方は各地で異なる理解を派生させている。中国の漢代から、朝鮮半島では三国時代、日本の飛鳥時代の墓室や棺などに描かれはじめ、天井部の天文図とともに宇宙観を表していた。また被葬者を守護する辟邪としての役割も担っている。

2. 四神が入った陰陽五行思想

陰陽五行思想は、中国の春秋戦国時代ごろに生まれた。陰陽思想と道教の五行思想が結び付いた思想である。五行思想又は五行説とは、古代中国に端を発する自然哲学の思想で、万物は木・火・土・金・水の5種類の元素から構成され、これらの5種類の元素は「互いに影響を与え合い、その生滅盛衰によって天地万物が変化し、循環する」というものである。日本では陰陽五行説が人間界の吉凶を占う実用的技術として受容され、中国の占術・天文学の知識を取り入れるだけでなく神道、道教、仏教などからも様々な影響を受け、日本独自の発展を遂げたと考えられる。

表1 陰陽五行思想の基礎

五行説	木	火	土	金	水
五色	青	赤	黄	白	黒
五方	東	南	中央	西	北
五時	春	夏	土用	秋	冬
五星	木星	火星	土星	金星	水星
五感	目	耳	鼻	口	皮膚
五味	酸	苦	甘	辛	鹹
五獣	青龍	朱雀	黄龍	白虎	玄武
十干	甲・乙	丙・丁	戊・己	庚・辛	壬・癸
十二支	寅・卯	巳・午	辰・未・戌・丑	申・酉	亥・子

(稲田義行『現代に息づく陰陽五行』2003年、pp.74-75, 99, 101をもとに筆者が作成)

表1は、五行説の基本構成を表にしたものである。万物は木・火・土・金・水の5種類の元素からなるという説であり、春秋戦国時代の末頃に陰陽思想と一体で扱われるようになり陰陽五行思想となった。その中に、中国から興った四神信仰も取り入れられており、それぞれ対応するものができた。漢代から一定した形になったと思われる四神は、簡単にまとめれば次のようになる。

青龍は東方を守護する。青は東方の色とされている。青龍の季節は春とされる。白虎は西方を守護する。季節は秋とされている。白は西方の色とされる。朱雀は南方を守護する。朱雀の季節は夏とされる。朱は南方の色とされる。足の長い亀に蛇が巻き付いた形の玄武は北方を守護する。季節は冬とされている。玄(黒)は北方の色とされる。

陰陽五行説は日本の歴史に深い関わりを持ち、占術を通して奈良時代・平安時代の日本文化を動かしてきた。

干支は陰陽五行説とも結び付いて様々なト占にも応用された。陰陽道の占術の基本は、木、火、土、金、水の五行にそれぞれ陰陽二つずつ配する。十干は甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸であり、訓読みにすると、きのえ、きのと、ひのえ、ひのと、つちのえ、つちのと、かのえ、かのと、みずのえ、みずのととなり、こういったもので五行（火・水・木・金・土）が明解になる。例をあげると、かのえは「金の陽」、そしてかのとは「金の陰」である。陰陽は語尾の「え」が陽、「と」が陰である。十二支にも五行が配されている。

日本でいつごろから、天文観測と天体に注意が払われるようになったのかについては、古事記、日本書記を見ても、天文に関わる神話はほとんどなく、飛鳥時代以前の星や月日を表した考古学的遺物などもほとんど知られていない。このため、古代以前の日本では、中国的な国家の建設と運営が強く意識されるようになった飛鳥時代が、天文に関する転換点となったとみられている¹。古代中国の道教を中心として陰陽・法家など諸家を結集編集した漢代の書である『淮南子』²が、6世紀に日本に入ったころ、暦法・仏教・儒教とともに陰陽五行説も伝わり、天文観測とそれに基づく占いや暦・時刻の管理を行う陰陽寮が確立された。

『淮南子』の、陰陽五行説の理論に基づいて論述する天文訓では、五行説に取り入れられた四神とそれらを司る方位・対応する干支・季節・星・色等について以下のように記述されている。

<淮南子・卷三章・天文訓>

「何謂五星？東方，木也，其帝太皞，其佐句芒，執規而治春；其神為歲星，其獸蒼龍，其音角，其日甲乙。南方，火也，其帝炎帝，其佐朱明，執衡而治夏；其神為熒惑，其獸朱鳥，其音徵，其日丙丁。中央，土也，其帝黃帝，其佐後土，執繩而制四方；其神為鎮星，其獸黃龍，其音宮，其日戊己。西方，金也，其帝少昊，其佐蓐收，執矩而治秋；其神為太白，其獸白虎，其音商，其日庚辛。北方，水也，其帝顓頊，其佐玄冥，執權而治冬；其神為辰星，其獸玄武，其音羽，其日壬癸。」³

訳⁴

「五星とは何か。東方は気である。その帝は太皞、その佐（辛相）は句芒で、規（コンパス）をとって春期を治める。神は、歳星（木星）である。禽獣では、蒼龍。五音では、角。暦日では、甲と乙。南方は火である。その帝は炎帝、その佐は朱明で、はかりをとって夏期を治める。神は、熒惑（火星）である。禽獣では、朱鳥。五音では、徵。暦日では、丙と丁。中央は土である。その帝は黄帝、その佐は后土で、繩（すみなわ）をとって四方を支配する。神は、鎮星（土星）である。禽獣では、黃龍。五音では、宮。暦日では、戊と己。西方は金である。その帝は少昊、その佐は蓐收で、矩（ものさし）をとって秋期を治める。神は、太白（金星）である。禽獣では、

1 奈良文化財研究所『星と日月の考古学』図録第54冊（2011年）pp.13.

2 前漢の宗室の一人である淮南（わいなん）王劉安編の書物である。

3 中国哲学書電子化計画より <http://ctext.org/huainanzi/zh>（アクセス：2013年6月13日）

4 『淮南子 説苑』戸川芳郎ほか訳、平凡社〈中国古典文学大系6〉、1974年 pp.25-48.

白虎。五音では、商。暦日では、庚と辛。北方は水である。その帝顓頊、その佐は玄冥で、權（秤のおもり）をとって冬期を治める。神は、辰星（水星）である。禽獣では、玄武。五音では、羽。暦日では、壬と癸。」

「勾陳・黄龍」は四神の中心に位置し、柱として存在している。また、「勾陳・黄龍」は平安時代に編纂された『占事略決』⁵でも、十二天将の一つとして位置付けられており、四神の説もある。十二天将（貴人・騰蛇・朱雀・六合・勾陣・青龍・天空・白虎・大裳・玄武・大陰・天后）とは、安倍晴明をはじめとする陰陽師にとって必須の占術であった六壬神課⁶で使用する象徴体系の一つであり、つまり式神である。北極星を中心とする星座に起源を持っており、それぞれが陰陽五行の説に当てはまる⁷。式神として最もよく知られているのは十二天将であろう⁸。こういった組み合わせに、中国から日本に入った思想や四神信仰の足跡がよく見られる。

例をあげると、『占事略決』第4章の「十二将所主法第四」では十二天将について以下の解説がされている（『占事略決』第四章「十二将所主法第四」）⁹。

- 「前一 騰蛇火神家在巳主驚恐怖畏凶将
 - 前二 朱雀火神家在午主口舌懸官凶将
 - 前三 六合木神家在卯主陰私和合吉将
 - 前四 勾陳土神家在辰主戰鬪諍訟凶将
 - 前五 青龍木神家在寅主錢財慶賀吉将
 - 天一 貴人上神家在丑主福德之神吉将大无成
 - 後一 天后水神家在亥主後宮婦女吉将
 - 後二 大陰金神家在酉主弊匿隱藏吉将
 - 後三 玄武水神家在子主亡遺盜賊凶将
 - 後四 大裳土神家在未主冠帶衣服吉将
 - 後五 白虎金神家在申主疾病喪凶将
 - 後六 天空土神家在戌主欺殆不信凶将
- 前盡於五，後終六，天一立中央，為十二將定吉凶而斷事者也。」

5 『占事略決』は、平安時代の陰陽師・安倍晴明が撰したとされる、現存する陰陽道に関する書物としては最古のものである。

6 六壬神課（りくじんしんか）は、およそ2000年前の中国で成立した占術であり、時刻を元に天文と干支術を組み合わせて占う。日本の平安時代から鎌倉時代にかけて、陰陽道を統括していた陰陽寮では六壬神課のテキストが使用されていた。

7 仏教の十二神将とは異なる。

8 式神については式盤の神霊とされることが多い。一般には密教の護法童子や眷属神のような、神仏と人間の中間的な霊的存在と認識されてきたようである。

9 村上修一『日本陰陽道史総説』（1981年）pp.139-169.

資料の中から四神と勾陳に関する情報をまとめてみると、次のようになる。

表2 四神と勾陳の組み合わせとそれぞれ対応する干支、陰陽、季節、方角を表す関係表

十二天将		五行	十二支	十干	陰陽	季節	方角
前二	朱雀	火 神	午	丙	陽	夏	南
前四	勾陳	土 神	辰	戊	陽	土用	南東
前五	青龍	木 神	寅	甲	陽	春	北東
後三	玄武	水 神	子	壬	陽	冬	北
後五	白虎	金 神	申	庚	陽	秋	南西

『古事略決』の第4章をもとに筆者が作成した¹⁰

表2では、表1にまとめた五行説の基礎知識と同様の情報がみられる。さらにここでは陰陽思想に関する部分も明らかにされている。

以上のように、中国の陰陽五行思想をもとに朝鮮を経由し、古代朝鮮では、三国時代から、特に十二支と四神が墓の壁に盛んに書かれていた。

3. 二十八宿と四神の関係

中国では、青銅器時代（殷中期）から天文に注意が払われ、二十八宿を用いた星や月・太陽の観測がなされてきた。天文観測の詳しい記録は戦国時代（紀元前4世紀）に始まり、漢代以後に繁栄した。二十八宿とは天の赤道沿いに見られる28の星座である。4方位を7つずつのグループに分け、それぞれの方位に青龍・玄武・白虎・朱雀の姿を当てはめているとされる。二十八宿の起源には諸説あるが、東アジアにおける説は2つの説に区別できる。二十八宿がインドで発生したものが中国に伝わったという説と、インドと中国で同時期に別々に発生したという説があり、定かではない。

日本にて使用される二十八宿の一覧は次のようになる（図3、4参照）。南方朱雀の星宿は井宿、鬼宿、柳宿、星宿、張宿、翼宿そして軫宿という。北方玄武の星宿は斗宿、牛宿、女宿、虚宿、危宿、室宿、壁宿という。西方白虎の星宿は奎宿、婁宿、胃宿、昴宿、畢宿、觜宿、參宿という。東方青龍の星宿は角宿、亢宿、氏宿、房宿、心宿、尾宿、箕宿という。星宿名には和訓もある。表3は、様々な文献資料を参考に、四神が司る四方に分けた中国・朝鮮・日本・インドの古星座の名前（宿名）を集めたものである。中国語の表記の英語訳も併記する。

10 村上修一『日本陰陽道史総説』pp.139-169.

表3 四神の四方に分けられた二十八宿の一覧表

四神	二十八宿 ¹¹					
	中国語	ピンイン、韓国語、日本語 訓読		サンスクリット語	英語	
東方青龍	角	Jiǎo	각	すぼし	Citrā	Horn
	亢	Kāng	항	あみぼし	Niṣṭyā	Neck
	氏	Dī	저	とも	Viśakhā	Root
	房	Fāng	방	そい	Anurādhā	Room
	心	Xīn	심	なかご	Jyeṣṭhaghñī	Heart
	尾	Wěi	미	あしたれ	Mūlabarhaṇī	Tail
	箕	Jī	기	みぼし	Pūrva-Aṣādhā	Winnowing Basket
北方玄武	斗	Dǒu	두	ひきつ	Uttara-Aṣādhā	(Southern) Dipper
	牛	Niú	우	いなみ	Abhijit	Ox
	女	Nǚ	여	うるき	Śravaṇā	Girl
	虚	Xū	허	とみて	Śraviṣṭha/ Dhaniṣṭhā	Emptiness
	危	Wēi	위	うみやめ	Śatabhiṣā	Rooftop
	室	Shì	실	はつい	Pūrva-Proṣṭhapada	Encampment
	壁	Bì	벽	なまめ	Uttara-Proṣṭhapada	Wall
西方白虎	奎	Kuī	규	とかき	Revatī	Legs
	婁	Lóu	루	たたら	Aśvayuj	Bond
	胃	Wèi	위	えきえ	Bharaṇī	Stomach
	昴	Mǎo	묘	すばる	Kṛttikā	Hairy Head
	畢	Bì	필	あめふり	Rohiṇī	Net
	嘴	Zì	자	とろき	Invakā	Turtle Beak
	參	Shēn	삼	かがすき	Bāhu	Three (Stars)
南方朱雀	井	Jǐng	정	ちちり	Punarvasu	Well
	鬼	Guǐ	귀	たまほめ	Tiṣya	Ghost, Oni
	柳	Liǔ	류	ぬりこ	Aśleṣā	Willow
	星	Xīng	성	ほとほり	Maghā	Star
	張	Zhāng	장	ちりこ	Pūrva-Phalgunī	Extended Net
	翼	Yì	익	たすき	Uttara-Phalgunī	Wings
	軫	Zhěn	진	みつけ	Hastā	Chariot

(筆者が注 11 の文献資料を基に作成したもの)

二十八宿は太陰太陽暦や星占いはもちろん、天球上での星の位置を表わすのにも使われた。西洋などの影響を全く受けずに独自に発達した。また戦国初期以降は、二十八宿は東西南北の4方位7

11 京都大学人文科学研究所「日本の古星図と東アジアの天文学」京都大学人文科学報・82号(1999年)

<http://ci.nii.ac.jp/naid/110000238826> (アクセス: 2012年10月)

古代朝鮮の星座 <http://blog.daum.net/windada11/8754963> (アクセス: 2012年10月)

古代インドの星座 <http://sites.google.com/site/sreejiraj/indian-zodiac> (アクセス: 2012年10月)

奈良文化財研究所 飛鳥資料 平成23年年度春季特別展「星と日月の考古学」pp. 24.

星座に分けられ、それぞれに「四神」があてはめられた。中国の漢代から、宇宙観を表すために、四神と組み合わせになり、古墳の石室の壁に描かれることが多い。また、古墳の石室から出土した銅鏡に、四神と共に刻んだ星宿図の作例も少なくない。

古代中国や朝鮮半島においては、墓にしばしば星（二十八宿図）や月・太陽が表現されたが、星と四神に関連する考古学的資料によって遠い過去までたどることができる。例をあげると、新石器時代中期の中国の河南省西水坡遺跡の墓にも青龍・白虎と北斗七星がみられる（図2）。仰韶文化圏の紀元前4000年頃墓の埋葬方法には、死者の左右に貝殻を敷き詰め竜と虎の形が認められる。これまでに中国で発掘された竜虎にまつわる文物のなかでも非常に古いものだと思われる。細かく見ると、南に頭を向けて伸展葬された人骨の南側に貝殻を埋め込んで北に頭を向けた竜（東側）、虎（西側）とされる動物が表現されている。竜虎が向かう方向には北斗七星が描かれており、被葬者の魂を天に導く役割があったと考えられ、貝塚と骨の組み合わせによって表現される¹²。

中国の湖北省随州の曾侯乙墓（戦国時代後期、紀元前5世紀）から出土した二十八宿図を描いた衣装箱には、北斗七星を表す「斗」の字を中心に二十八宿の名称が書かれるとともに、東北七星と西方七星の外側には、青龍と白虎とおぼしき動物像が描かれており、最古の二十八宿図とされている¹³。二十八宿と北斗七星の組み合わせは、中国の交河流域の気象独特のものである。蓋の面積の限界から、四神の残り玄武と朱雀が描ききれなかったのか、それともまだ四神というものが完成していなかったのか考えなければならない。

四神と二十八宿と一緒に描かれている例が他にもいくつかあげられる。漢代・唐時代の墓志¹⁴、星座を背景とした四神壁画と、銅鏡に刻んだ星宿図と、高句麗の古墳の天井に多く描かれた星座のグループが発見できる。日本ではキトラ・高松塚古墳の石室に描かれている四神図と二十八宿がある。キトラ・高松塚古墳の四神壁画¹⁵や天文図源流については、発掘当初から、高句麗古墳群（江西大墓等¹⁶）と比較する研究がなされており、両国の繊細華麗な四神壁画・二十八宿図は死者が永遠の眠りにつく宇宙を形成していると思われる¹⁷。様々な技術で作られた天文図は古代に生きていた人々の思想を表現している。特に古墳壁画としてともに描写されてきた四神と二十八宿が、互いを巡る流れの中に表されている¹⁸。

当時の中国の世界観、陰陽五行思想がよく表れている銅鏡を見ると、前漢末から、四神文様とともに、天を象徴する二十八宿の星座を円形に配した文様や、地を象徴する十二支名を方形の枠内に記したものをあわせる鏡もある¹⁹。

12 奈良文化財研究所『星と日月の考古学』図録第54冊（2011年）pp.11.

13 図1参照

奈良文化財研究所『星と日月の考古学』図録第54冊（2011年）pp.16.

14 図8参照

15 図5・6参照

16 図7参照

17 奈良文化財研究所『星と日月の考古学』図録第54冊（2011年）pp.22-24.

18 天文学史ギャラリー：<http://www.sci-museum.kita.osaka.jp>（アクセス：2013年11月）

19 図9参照

おわりに

以上、陰陽思想と五行思想が結び付いて生まれた陰陽五行思想、そして古代星座の二十八宿の、四神信仰との関係・思想の繋がり方を考えてきた。古代中国の四神信仰が歩んできた長い道といえば、もともとは人の思想や信仰に基づく図像であったが、次第に役割や表現が発達したといえる。陰陽五行思想に取り入れて以降、役割も一段と増えただけでなく、日本の陰陽道まで影響を与えており、根柢の深い思想になったと考える。朝鮮半島経由で四神が司る四宮の二十八宿に関する中国的な観念や体制が日本にも持ち込まれていたことも、古代文化交流の一つの階段として見なしてもよいだろう。

参考文献

- 稲田義行『現代に息づく陰陽五行』日本実業出版社（2003年）
- 大塚初重『季刊考古学・別冊13 東アジアの装飾古墳を語る』雄山閣（2004年）
- 奈良文化財研究所飛鳥資料館『星と日月の考古学』図録第54冊（2011年）
- 奈良文化財研究所飛鳥資料館『キトラ古墳と発掘された壁画たち』（2005年）
- 奈良文化財研究所飛鳥資料館『キトラ古墳と壁画』（2006年）
- 奈良文化財研究所飛鳥資料館『キトラ古墳壁画十二支-子・丑・寅-』（2008年）
- 奈良文化財研究所飛鳥資料館『キトラ古墳壁画四神-青龍白虎-』（2009年）
- 奈良文化財研究所飛鳥資料館『キトラ古墳壁画四神』（2010年）
- 『陰陽道の本-日本史の闇を貫く秘儀・占術の系譜』「New sight mook - Books Esoterica 第6巻」学研（1993）
- 上海教育出版社、中国歴史博物館編『中国古代史参考図録・隋唐五代時期』（1990年）
- 橋本敬造『中国占星術の世界』東方書店（1993年）
- 村上修一『日本陰陽道史総説』塙書房（1981年）
- 戸川芳郎ほか訳『淮南子 説苑』中国古典文学大系6、平凡社（1974年）
- 百橋明穂『東アジア美術交流史論』中央公論美術出版（2013年）
- 劉焯編、荻野友範訳『荻野友範『図説中国文明史3・春秋戦国、争覇する文明』創元社（2007年）
- 吉野裕子『陰陽五行と日本の民俗』人文書院、（1983年）
- 吉野裕子『十二支一易・五行と日本の民俗』人文書院（1994年）

インターネット資料：

- 中国哲学書電子化計画 <http://ctext.org/huainanzi/zh>（アクセス：2013年6月13日）
- 京都大学人文科学研究所『日本の古星図と東アジアの天文学 Old Celestial Cartography in Japan with Reference to East-Asian Astronomy』京都大学人文学報・第82号、pp.45-99、1999年
<http://ci.nii.ac.jp/naid/110000238826>（アクセス：2012年10月）

<http://www.sci-museum.kita.osaka.jp> (アクセス：2013年8月)

天文学史ギャラリー：<http://www.sci-museum.kita.osaka.jp> (アクセス：2013年11月)

古代朝鮮の星座 <http://blog.daum.net/windada11/8754963> (アクセス：2012年10月)

古代インドの星座 <http://sites.google.com/site/sreejiraj/indian-zodiac> (アクセス：2012年1月)



図1 二十八宿が描かれた衣装箱 戦国時代(前5世紀)²⁰
湖北省随州市擂鼓墩曾侯乙墓出土
長7cm 高40,5cm 幅47cm 湖北省博物館蔵



図2 河南省濮陽市西水坡遺跡 M45 で発見された青龍²¹

20 劉焯編『図説中国文明史3、春秋戦国・争覇する文明』創元社、2007年、図289。

21 <http://webpic.chinareviewnews.com/upload/201201/29/101993530.jpg> (アクセス：2014年2月)

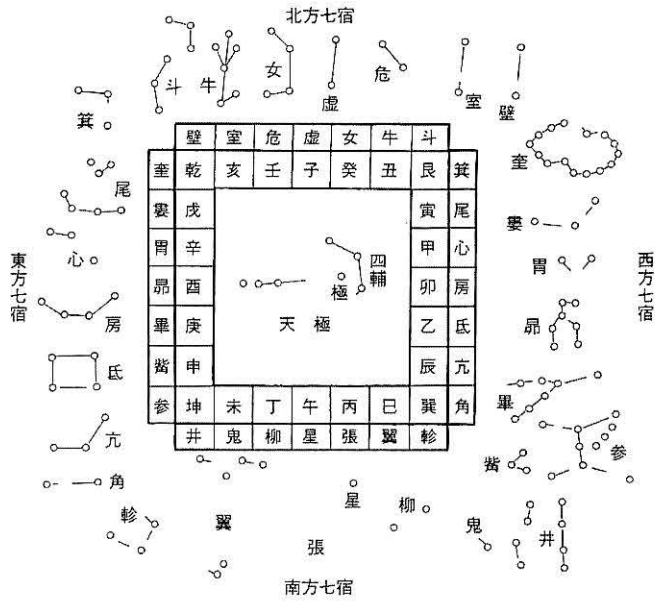


図3 高松塚古墳の二十八宿図 (天文図)²²⁾

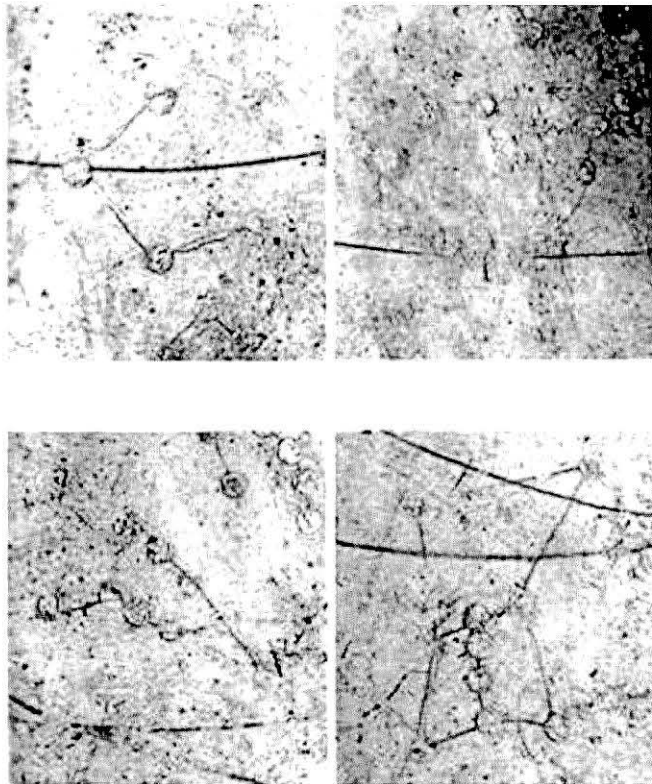


図4 キトラ古墳の二十八宿 (天文図)²³⁾

22 来村多加史『高松塚とキトラ古墳壁面の謎』pp.107.

23 奈良文化財研究所 飛鳥資料館『キトラ古墳』pp.12.



図5 朱雀 (キトラ古墳、南壁)²⁴

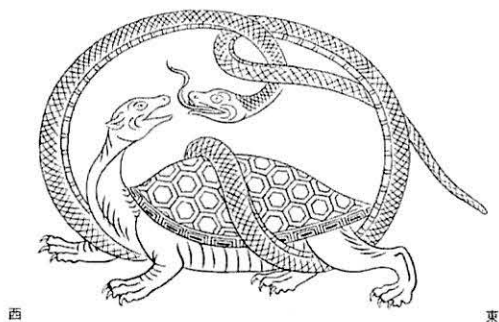


図6 玄武 復原図 (高松塚古墳、北壁)²⁵



図7 青龍と白虎 (江西大墓・江西中墓、東壁と西壁)²⁶

24 奈良文化財研究所 飛鳥資料館『キトラ古墳』pp.1.

25 奈良文化財研究所 飛鳥資料館『高松塚古墳壁画』pp.11.

26 奈良文化財研究所 飛鳥資料館『キトラ古墳壁画四神-青龍白虎-』pp.8



図8 二十八宿鏡（周時代）²⁷

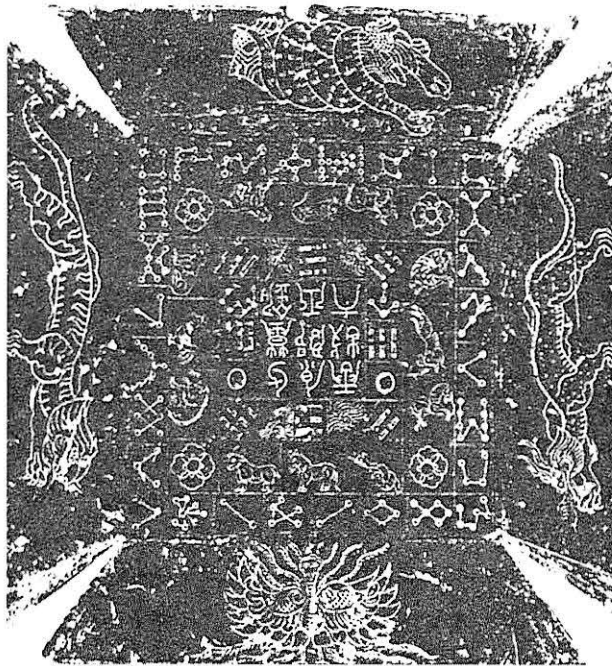


図9 二十八宿図（五代南唐時代）²⁸

江苏邳县王氏墓志、1964年出土、揚州博物館藏

27 上海教育出版社、中国歴史博物館編『中国古代史参考図録・隋唐五代時期』（1990年）pp.184.

28 上海教育出版社、中国歴史博物館編『中国古代史参考図録・隋唐五代時期』（1990年）pp.185.